

## 朝鮮史上における長城建設

高 寛 敏

はじめに

第1節 高句麗の長城建設

第2節 後期新羅の長城建設

第3節 高麗の長城建設

第4節 朝鮮王朝の長城建設

おわりに

キーワード：高句麗の大寧江長城、後期新羅の涇江長城、高麗の千里長城、朝鮮の鴨緑江行城、朝鮮の豆満江行城。

### はじめに

長城は外敵に対する防御施設であるから、それは同時にその時々々の国境を示しており、それゆえ歴史研究の重要問題となる。文献と考古学的調査によると、朝鮮史上における長城は高句麗長城を嚆矢として、後期新羅・高麗・朝鮮王朝時代に引き続いて建設されており、それらの国の領域拡張の過程を物語っている。

これらの長城については今まで個々に、あるいは抽象的に言及されてきたが、包括的、かつ具体的に論じた論究はまだないようにみえる。そこでここでは、今までの研究を総合して、さらに写真や図表・地図・私見を加えながら、この問題を包括的にまとめて今後の研究の出発点としたい。

### 第1節 高句麗の長城建設

朝鮮史上における最初の長城は、文献的には高句麗の「千里長城」であるが、最近異説が提

起されている。それは従来高麗長城と考えられていた「大寧江長城」が、高句麗長城とみなされるようになったことである。したがって、この問題から述べることにする。

1984年に文献にみえない長城が大寧江一帯で新たに発見された。発見後一年半にわたる詳しい踏査と、86年4月から8月に至るまでの発掘調査・航空写真と記録映画の撮影などを通じて、その全貌がほぼ明らかになり、1988年～96年にかけて発刊された『朝鮮遺跡遺物図鑑』（『조선유적유물도감』編集委員会・ピョンヤン）に「大寧江長城」の名で紹介され、まず孫永鍾「大寧江畔の古長城について」（손영중 「대령강반의 옛장성에 대하여」 『력사과학』 1987-2）が、その詳細を伝えた。

「大寧江長城」は、平安北道の大寧江とその支流の昌城江の東岸一帯にわたって築かれている。現在それは博川郡中南里から元南里、寧辺郡館下里、古城里、泰川郡竜興里、鶴塘里、徳化里、豊林里、陽地里、東倉郡鶴峰里、鶴松里、新安里へと続いており、その長さは300余里（120km余。朝鮮では1里＝400mとする周尺が用いられた。東京・大阪間の高速道路距離は約500km）に達する。それに加え、博川郡から雲田郡の間など、何か所かで長城から分かれた支城がみられる。また長城は、博川郡から大寧江河口まで連なっていたと考えられるが、城壁は確認されず、いくつかの城址が存在するだけである。発掘調査は45地点で行われた。城壁の築造方法は

地形によって様々で、石築、石築城心を土で覆ったもの、石と土を混合したもの、自然の絶壁をそのまま利用したものなどがある。残存する城壁の高さは7～10mである。要所に城門址があり、溪谷を渡る城壁には水口門がある。長城には邑城・鎮城・堡子が配置されているが、邑城としては博陵城・寧辺古城（撫州城）・泰州古城などが確認された。

博陵城は長城から600m離れた位置にある。丘陵の稜線を囲んだ周囲3・5kmの邑城で、外城と内城に分かれている。近くの中南里と元南里に長城から数百m離れて、周囲800m、500mの山城がある。山城からは長城が一望の下にあり、鎮城と考えられる。

寧辺古城は周囲4kmの包谷式山城で、内城と外城からなる土城である。その西南壁はそのまま長城壁となっている。

泰州旧城も周囲約4kmの包谷式山城で、外城・内城・北城からなっており、西壁は長城壁となっている。竜興里と鶴塘里には、長城近くに周囲数百mと1.2kmの山城があり、やはり山城と思われる。

邑城や鎮城でも17カ所で発掘が行われたが、長城と共通する瓦や陶磁器が多く出土した。

この時点では、高麗時代の長城と考えられていたが、その後の調査を踏まえて、孫永鍾「大寧江長城の構造と年代について」（손영중「대령강 장성의 구조와 년대에 대하여」(『역사과학』2003-3)は、新見解を展開した。

まず、長城は博川郡から大寧江河口まで連続しており、基本長城は総約375里に達するということである。それに基本長城には多くの支城が付設されており、その支城にも山城や遮断城が随所にみられ、とくに博川郡三峰里から定州市新峰里に続く支城は約130里もある。結局、基本長城と支城の総延長距離は約600里になるということである。

次に時代の問題である。以前に高麗時代と判断したのは、磁器が出土したこと、『高麗史』には10世紀中後葉から清川江以北の築城記事が多く出ており、末には鴨緑江河口に達したが、そこに大寧江周辺の地名がみられることであった。しかしこの時期には、対契丹に備えて鴨緑江河口まで進出することが急務で、大寧江流域



大寧江長城俯瞰写真



大寧江長城図

に長城を建設することは、中央集権体制が弱かった当時としては、眼中になかったと考えられる。また瓦は4世紀末の高句麗赫色瓦と5世紀の灰青色瓦で、高句麗では磁器も早くから生産していた、ということである。すなわち、大寧江長城は、427年の平壤遷都前後に首都防衛の目的で建設されたのである。

孫説は画期的なものであるが、瓦や磁器の詳しい内容の検討が鍵となるであろう。

文献的には著名であるが、考古学的遺構が明確でないのが、遼河東方に建設されたという「千里長城」である。

文献史料としては次の二条が重要である。

『旧唐書』太宗本紀貞觀五年条

詔遣広州都督府司馬長孫師 往収遼隋時戰士骸骨 毀高麗所立京観 建武懼伐其国 乃築長城 東北自扶餘城 西南至海 千有余里。

『三国史記』榮留王十四年条

唐遣広州司馬長孫師 臨遼隋戰士骸骨祭之 毀當時所立京観 春二月 王勳衆築長北自扶餘城 東南（西南の誤）至海 千有余里 凡一十六年 畢功。

これによると、高句麗は唐の侵略に備えて631年から16年間、東北の夫余（扶餘）城から海に至るまでの、千有余里（約500km）の大規模な長城を建設したことが分かる。唐の第一次侵略が645年であるから、その戦後も工事が続いていたのである。しかしその遺構は明確でなく、諸説が提起されている。

長城起点の夫余城は、吉林の鹿山を中心としていた夫余が、4世紀初頃に高句麗に追われて残名を維持していた地で、以前から説かれていた農安に比定される。別に高句麗遺物が多く発見された西豊の城子山山城説もあるが、その周辺は農耕に適しない山地である。その反面、農安は条件が良いので後期夫余の根拠地にふさわしく、城子山山城は高句麗が鹿山占領の頃に築

造した城とみるのが、妥当と考えられる（余昊奎「高句麗 千里長城의 経路와 築城背景」(『国史館論叢』91, 2000年)。終点は、大連市金州区付近の大黒山山城（高句麗の卑沙城）か、渤海湾に面した営口が候補となる。とくに卑沙城は隋・唐の水軍が上陸した地点であることが注目される。

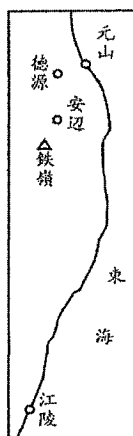
「千里長城」の全体像については、遼河東方の山城を連結したものとする説（陳大為「遼寧境内高句麗遺跡」、『遼海文物学刊』1989-1）、山城群前面には、農安から海に至って、土壁の痕跡や土壁を表す地名が多く分布することから、山城前面の平野に築造された長城とみる説（李健才「東北地区中部的遼寧和延辺長城」、『遼海文物学刊』1987-1）、これとは内容が異なるが、結論的には同様の結論に至る説（禹錫勳『高句麗 千里長城의 再検討』2014年）、山城群とは別に遼河兩岸に長城を築いたとする説（王綿厚「東北古代夫餘の興衰及王城變遷」、『遼海文物学』1990-2）などがある。これに対し李成制「高句麗長城에 대한 基礎的考察」(『嶺南学』25, 2014年)は、綿密な実地踏査を踏まえて、山城以外には高句麗代の城壁はほとんど確認されず、また文献史料が起点を明示しながら、終点は「至海」とだけしていることから、「千里長城」とは一部の城壁を補完しながら、遼河東方の山城群を農安から海に至るまでの約500kmを増改築したものと推定した。現在までの調査からすると、遼河東方には山城以外の長城の存在は悲観的であり、三城連結説か、李説ぐらいが穏当かと思われる。

## 第2節 後期新羅の長城建設

渤海と接するようになった新羅は、北進政策を推進しながら対渤海防御に努めた。『三国史記』には、聖徳王紀20年（721年）7月条に、「微何瑟羅道（江陵）丁夫二千、築長城於北境」とあり、地理志・朔州・井泉郡（元山市徳源）条に、

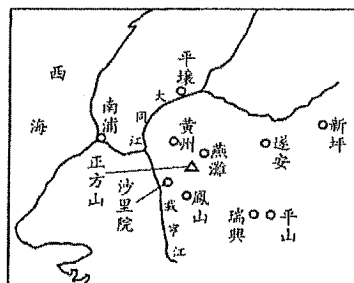
景德王がここに炭項関門を築いたとある。これは新羅東北方の防備のためである。32年(733年)に渤海が唐の登州を攻撃した事件が起こり、新羅は唐に呼応して渤海の南辺を襲おうとしたが、大雪のために失敗した。これより新羅と渤海は軍事的に対立するようになったので、新羅は北方の防備に本格的に着手したのである。また景德王7年(748年)に大谷城(平山)などの黄海道14郡県、21年に五谷(瑞興)など6城を設置したのがそれで、平山以北の海州・載寧・鳳山・瑞興・遂安一帯を支配したことになる。宣徳王紀2年(781年)条の「安撫涇江(大同江)南州郡」を合わせ考えると、新羅は涇江以南を基本的に掌握し、憲徳王紀18年(826年)秋7月条「徵漠山北諸州郡一万、築涇江長城三百里」によると、この涇江長城を国境としたことになる。以上によって、新羅の東北界は「北境長城」「炭項関門」、西北界は「涇江長城」であったことが分かる。

地理志によれば、東北界は井泉郡であることが明白であるが、『新增東国輿地勝覧』徳源都護府・古跡条に、「古井泉城 在府北十五里、石築、周四千三百二十二尺、今廢」とある。高麗時代にはもっと北方に「千里長城」を建設したので、徳源、つまり井泉郡の北部に築かれた古井泉城は「炭項関門」の可能性が大きいと思われる。問題は721年の「北境長城」である。



井泉郡の南は朔庭郡であるが、その条によれば、真興王17年(556年)に比列州(安辺)に軍主を置き、700年前後の孝昭王代に築城したが、「周一千一百八十歩」であったとある。『新增東国輿地勝覧』安辺都護府・城郭条に、「鶴城山城、在府東五里、石築、周三千九百三十尺、高十二尺、内有四泉、有軍倉、新羅孝昭王時築比列忽城、疑此」とあるが、規模の差が大きい。また関防条に「浪城浦営、在府北二十五里、隸南道」ともある。孝昭王の次代が聖徳王であるが、この王代に安辺から徳源まで進出したかどうかは不明である。そこで当面は「北境長城」は関防を備えた浪城浦営に比定し、その時に鶴城山城が増築されたと考えておく。「北境長城」に動員されたのが2千名でしかないことからしても、これが新たに獲得された北境の長城建設とは考えがたいのである。結局、東北端は「炭項関門」であって、関門左右には長距離の城壁が連なっていたと考えられる。

残る問題は『新唐書』渤海伝に「南北新羅、以泥河為境」とあることである。この「泥河」は『三国史記』に度々出ているが、それはいずれも何瑟羅(江陵)の北、溟州郡連谷川である。地理志・溟州条に「賈耽古今郡国志云、今新羅北界溟州」、太宗武烈王紀5年3月条「王以何瑟羅地連靺鞨、人不能安、罷京為州、置都督以鎮之、又以悉直為北鎮」とあるが、これによると、8世紀に活躍した唐の賈耽は新羅北界を溟州、すなわち泥河と認識していた。それは658年頃に靺鞨(高句麗)の勢力が一時溟州に及び、



そこを北鎮としたことがあったからと思われる。『新唐書』の「以泥河為境」は賈耽の『古今郡国志』の認識を継承したもので、それは基本的には誤認である。「泥河」を徳源以北に比定する説には賛成出来ない。

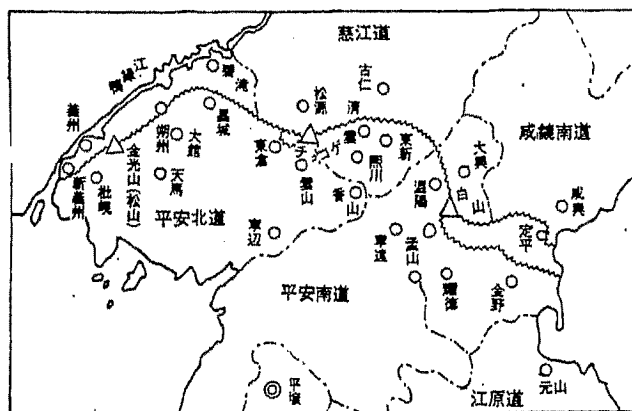
新羅の西北境は「溟江長城三百里」である。考古学的調査によると、載寧江が大同江に合流する付近、黄海南道黄州郡鉄道里に始まり、東に正方山、燕灘郡慈悲山を経て、東北に遂安郡、延山郡、新坪郡に至る長城が確認されている。全貌が明らかになったとは言えないが、「三百里」(120km)に相当する可能性がある。長城は連続的に城壁を築いたものではなく、険しい地形をそのまま利用し、要所々々だけに城壁を築いたものである。長城は正方山で正方山城の城壁に接しており、正方山城は周囲12km、高麗時代に築かれた黄海道第一の山城である。この長城についての記録は高麗時代にないので、位置からいっても、新羅の「溟江長城」ではないかと思われる。張相烈「洞仙関門の建築年代について」(장상렬『동성관문의 건축년대에 대하여』『역사과학』1985-2)は、長城について説明しながら、正方山から鳳山に至る慈悲嶺の長城も「溟江長城」の一部とみなし、慈悲嶺に設置された洞仙関門(沙里院市広成里郊外)も、南北をつなぐ第一の交通路であったので、やはり「溟

江長城」に属すると推測した。しかし正方山城の築城と「慈悲嶺行城」の名は、高麗時代のものであることからすると、慈悲嶺の長城は高麗時代の築城で、それと「溟江長城」を合わせて「慈悲嶺行城」と称されるようになったとも言えよう。後考に俟つ。

### 第3節 高麗の長城建設

高麗は後三国統一後に積極的に北方に進出し、930年頃までには清川江以南を掌握、990年代に鴨緑江河口にまで達した。その間、各地に築城し、11世紀に北部国境地帯に高麗最大の遺構「千里長城」を建設したことは『高麗史』に詳しい。

高麗の「千里長城」については、崔義林「千里長城の築城と経緯、その位置について」(최희림「천리장성의 축성과 경위, 그 위치에 대하여」『역사과학』1983-4)に詳説されている。『高麗史』兵志・城堡条・徳宗2年条に「命平章事柳韶、創置北境関防、起自西海浜古国内城界鴨緑江入海処、東跨威遠・興化・静州・寧海・寧徳・寧朔・雲州・安水・清塞・平虜・寧遠・定戎・孟州・朔州等十三城、抵耀徳・静辺・和州等三城、東伝于海、延袤千余里、以石為城、高厚各二十五尺」とあって(安水は誤入)、1033年から鴨緑江河口から東海に至るまでの千余里の長城建設が始まったことを伝えている。



千里長城図



東新郡東新邑の城壁

以下、崔論文の記述を図表化すると次のようである。

段階	築造年代、期間	区間	長さ	構造
1	1033年8月～ 1035年8月、 約1年	鴨緑江河口の新義州土 城里～義州郡金光里金 光山	約35km	鴨緑江南岸の崖や丘陵を利用して 築いた土城(基礎は石)。6鎮城(鎮 城北門が長城門)。12望台
2	1035年9月～ 1040年。 約5年	金光山～朔州・昌城・ 東倉～雲山郡～熙川市 克城嶺	約235km	高峻な山岳地帯を伝う石城。鎮城 は長城より1～8km離れる。6鎮 城。約56望台。10長城門
3	1041年～ 1043年末。 約3年間	克城嶺～寧遠郡・大興 軍～耀徳郡界の白山	約190km	高峻な山岳地帯を伝う石城。谷間 では河水の内側山地に築城。3鎮 城。14堡子。6長城門
4	1044年～ 1046年末。 約3年間	白山～定平郡三島里。 白山～金野郡加進労働 者区	重城合延長 約170km	石城と土城を地形に応じて配合。 7鎮城

段階	番号	鎮城名	所在地	築造年	構造
1	1	寧海鎮	新義州市土城里	1033	長城始点 周囲約4km 土城 約2kmは長城壁
	2	麟州鎮	送鵬里	1030	周囲5km弱 平山城 西北壁は長城壁
	3	静州鎮	仙上里	1033	周囲6km弱 土城 西北2km長城壁
	4	威遠鎮	義州郡台山里	1029修	周囲5km強 石城と土城 内城と外城 北壁1km が長城壁
	5	寧徳鎮	枇峴郡下端里	1030	周囲約2km 土城
	6	興化鎮	同後里	995修	周囲3km弱 包谷式山城 石城
2	7	定戎鎮	義州郡春山里	1028	周囲約3km 石城
	8	寧朔鎮	天摩郡西古里	967	周囲約4km 土城
	9	朔州鎮	大館郡大館邑	1032	周囲約4km 石城 内城と外城
	10	昌州鎮	昌城郡錦野里	1035	周囲1km弱 石城
	11	鶴城鎮	東倉郡鶴城里	1032	周囲約4km 包谷式土城
	12	雲州鎮	雲山郡上院里	972	周囲4km弱 土城
3	13	清塞鎮	熙川市	979	周囲約2km半 平山城
	14	平虜鎮	東新郡西陽里	1001	周囲約2km 石城 一部長城壁 6堡
	15	寧遠鎮	寧遠郡都三里	10C前半	周囲1km強 平山城 8堡子
4	16	長州鎮	定平郡旧倉里	1012	周囲約3km 平山城 石城と土城 北壁が長城と 接する 6戍
	17	定州鎮	旧邑里	1044	周囲2km半 包谷式山城 石城 内城と外城 東北が 長城に接する
	18	元興鎮	復興里	1044	沿岸台地 周囲約2km 土城 4戍
	19	孟州鎮	孟山郡中興里	995	周囲2km強 石城
	20	耀徳鎮	耀徳郡竜坪里	1023	周囲2km半 石城 長城接 戍
	21	和州鎮	城里	973	周囲約3km 石城 戍
	22	静辺鎮	金野郡蓮洞里	1039	周囲約2km 土城 戍

鎮城明細表

靖宗10年条に「命金令器・王寵之、城長州・定州・及元興鎮」、12年条の「城永興鎮（和州鎮）」で1046年に終了したことを示している。1019年の契丹戦争の終了後である。城堡条と列伝の記事、現地調査を総合すると、長城は4段階に分かれて築かれており、建設期間は約13年、総延長630km(1600里)。現地調査によって麟州・昌州・鶴城の3鎮城がプラスされるので、22鎮城が付設されたことになる。そのうち寧海・麟州・靜州・威遠・平虜・長州・定州・耀徳の各鎮城の一部城壁は、長城壁の一部となって接している。険しい山岳地帯の第二・第三段階の長城では、鎮城は長城近くの平地を利用したため、長城から1～8km離れて位置している。鎮城の構造はすべて平城か平山城で、周囲は2～6km、石城も土城もある。鎮城は長城建設と同時のものもあるが、それ以前に築かれたものも少なくない。

長城には付属する監視哨所が要所に配置された。第一・第二段階では比較的規模の小さい望台（周囲30～40m）、第三段階では堡子、第四段階では戍（周囲80～200m）が築かれたが、それらの総数は百余個に達する。

高麗が心血を注いで築いた長城は、現在の平安北道の北端から慈江道を経て、咸鏡南道の永興湾に達する壮大な土木建造物であった。とくに女真族の住む咸鏡道方面が重要であったので、白山から東海の永興湾に至るまでは二重城壁とした。これにより、高麗は北方に大きく進出し、11～12世紀には北に勢力を張った契丹族・女真族と平和裡に外交関係を保ち、東アジアの強国として繁栄したのである。

#### 第4節 朝鮮王朝の長城建設

高麗時代の領土を北に広げて、鴨緑江河口から豆満江河口に至る長大な長城を築造し、現在の朝鮮国境を確定したのは、第4代王・世宗（1418～1450年）である。世宗は朝鮮史上、第一の名君として知られるが、それは王が中国王

朝の圧力を退け、朝鮮の実情にあった科学と文化を発展させながら、世界的にみても先進的な業績を残したばかりか、この長城を築造したからである。

世宗の業績として、最もよく知られるのは朝鮮文字（ハングル）『訓民正音』を創製したことであるが、朝鮮独特の暦である七政算、世界最初の測雨器、新式銃筒、活版印刷術の改良と優秀な活字の鑄造、医学などの書物の出版、雅楽の改良など、そのほかにも数多い。

これらの業績はいずれも、事大主義的な両班士大夫の反対を受けながら達成したのであるが、長城建設も例外ではなかった。高麗の千里長城外には女真族が居住し、明王朝の支持を受けながら、朝鮮と対立していたので、それは直接的には女真族との問題であったが、間接的には明との問題でもあった。世宗は女真族に対しては、硬軟両用の策を取り、主に咸鏡道の女真族に対しては帰化政策、その北に居住して敵対する女真族に対しては北伐という強硬策に打って出た。帰化政策にも長城建設にも強硬な反対勢力があったが、幾多の困難を克服して、それを成し遂げたのであるが、それは一般に周知の事実である。

長城は当時、行城と呼ばれたが、『世宗実録』によれば、だいたい次のような経過を取った。鴨緑江南岸の平安道では、閔延趙明干口子は15世紀代の40～42年、碧団口子は40～41年、虞芮口子は42年、慈城池寧怪口子・満浦口子・高山里口子は42年、昌州口子は43年、渭源口子は44年、慈城は45年、碧潼・定寧は46～47年、理山は49年、義州は50年である。

豆満江南岸では、穩城は41～43年、鍾城は42～43、45～46年、会寧は46～48年、三水は47年、甲山は48年である。これで一旦終了したが、70～80年代に補充し、1500年には行城についての地図が作成されたという。この期間に南部地方の人民の大量移住が実施された。

行城は自然の絶壁を利用しながら、平地や谷間に築かれた。城壁は所により両面築造と外面築造を用い、行城が途切れる場所には城堡が各所に配置された。こうして行城は延々千数百里となった。以上の記述は、『朝鮮遺跡遺物図鑑』と1979～1983年に刊行された『朝鮮全史』（『조선전사』社会科学歴史研究所・ピョンヤン）を参考にしたものである。

## おわりに

朝鮮歴代の長城について、不十分ながら従

来の研究を総合し、若干の補足と推測を加えた。拙論がこれからの研究の一つの出発点となり、今後の調査と研究によって深化されれば幸いであるが、見落としや誤りがないとも言えない。叱正を願う次第である。

筆者は、久しく原因不明の腹痛を病んで、外出も困難な状態となったので、資料収集にあたっては、東京大学の早乙女雅博氏や韓国の梁承熹氏、小平市の朝鮮大学校歴史科の諸先生方のお力添えを仰ぐ仕儀となった。末尾ながら謝意を述べさせて頂きたい。

鴨緑江行城

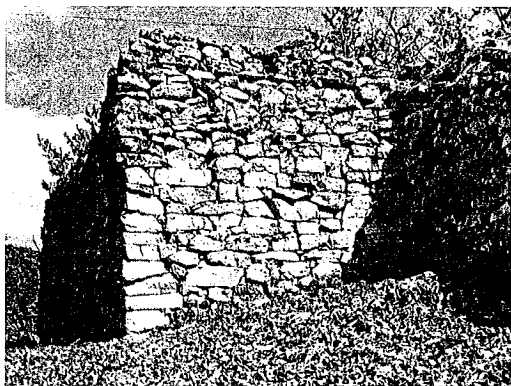


義州郡金光里城壁

豆満江行城



穩城郡豊西里城壁



慈城郡慈柞嶺城壁



穩城郡営江里城壁